

広島俳句倶楽部

令和五年七月作品集

父のこと

栄吉

父は悪口を職人であった。自身のことを語ることは殆どなかった。その父が、一時暇俳句を学んでいたようだ。父の句が残っているわけではないが、「虚子全集」を大切にしていたことは覚えている。私の句を父に見せることができたなら、どんな顔をするだろう。今風にスルーするか。そんなたいしたものないことを考えている。父の日である。

父の日やハイライトとかいこいとか

薰風や洗ひ清めし地藏尊

代田より水こぼれるる峠道

馬鈴薯の花や白寿で畑に立ち

しめやかな流れのありて水芭蕉

白薔薇の花弁散りたる夜の道

一瓶に二匹で目高売られをり

夏燕テニスボールの弾む音

晴天に对岸遠し夏の海

月見草駅の明りの消えにけり

《作品鑑賞》

森口良樹

栄吉さんのお父様への深い敬意と愛情があふれた作品を鑑賞させていただきました。私もつい、両親のことを思い出してしまいました。きっとお父様も、栄吉さんの句にうなずいて下さっていると思います。

父の日やハイライトとかいこいとか

お父様はきっと煙草がお好きだったのでしよう。初めはいこいを吸われていて、体に負担がないように途中でハイライトに変更なさったのではと思慮いたしました。お父様の指の茶色のニコチンが匂っているような気がしました。父の日の現在の自分が、過去の父を呼び覚ますとてもすてきな句でした。

馬鈴薯の花や白寿で畑に立ち

お父様は長寿でいらしたのですね。馬鈴薯の花が職人氣質のお父様をよく表していると思いました。白寿になられても畑に立つ矍鑠とした姿に、敬意と愛情が句にあふれていると感じました。

白薔薇の花弁散りたる夜の道

白薔薇を通してお父様の亡き姿を見つめておられるのではないのでしょうか。花弁がはらはらと散る夜の道のさまに、憂いや悲しみを押し殺す胸の内が句から伝わってきます。

月見草駅の明りの消えにけり

一夜限りと咲く月見草の花は、派手さや艶やかさはなく、むしろ質素な花です。駅の明かりがいつものように、いつもの時間に消えた自然さが、お父様の自然体の生きざまを忍ばせます。心に迫る句でした。

南風の安芸の駅家へ下りてゆく

安芸に入り古墳続くや青嵐

行々子遠くなりゆく大路かな

国分寺跡に来て刈る夏の草

不如帰鳴きたり地祇の和魂

揺すぶつて月下の梅を落としけり

弔ひの家に飛び来て夏の蝶

鬼ノ城に降つてすぐ止む夏の雨

老鶯や吉備に二つの神籠石

夏風や神の機嫌はけふ如何に

夾竹桃の囲む本川小学校

そよ風に柏景紫陽花波打てり

海辺へと下る道筋立葵

梅雨晴間ピアノを復習ふ音聞こえ

雷鳴に山の頂見上げたる

大粒の雨に目覚むる送り梅雨

荒梅雨に川の向うのかすみたる

午過ぎて雨の止みたる山法師

団扇にて扇ぐ酢飯の匂ひかな

葎より鶉飛び立つ朝かな

道に沿ふ蒲公英の黄とたまに白

薔薇の香や朝の雫のひとつ落ち

五月雨や大樟多き大通り

ときをりは雨やむときも夏の萩

寝転べばまた五月雨の音のする

南天の花散る坂を上り終へ

いっになく今宵は酔うて立葵

川土手によき風の吹く夕焼かな

老鶯のよき声の中ひた歩く

山里のつかのま晴れて時鳥

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

小流れに枝の浸かりて未央柳

翡翠を見て川沿ひを歩きけり

萱草の咲く坂上る家路かな

走り来る子供に抜かれ蟬の坂

わが手より子の手のひらに天道虫

香水の匂の残る試着室

徳利に夏薊活け夕餉かな

ほうほうと牛を呼ぶ声大夕焼

夕立や県境の橋濡れて越す

杖ついて野辺を歩けば蜻蛉くる

あざみ

六月やケーナの響く小ホール

フェスティバル後の静けさ若景風

この先に美術館見え針槐

花アカシア短き橋に立ちて見る

鉄線花へリコプターに立ち止まる

木の下で見上げてゐたり枹の花

いと薄きワインのグラス桜桃忌

しばらくは医師と雑談夏の夕

梅雨墨パソコンキーの音速き

文机に半日座る梅雨最中

亜矢

土佐に来て先づ厚切りの鯉かな

甘藍に台たわみたる土佐の市

旅先の朝食を待つ涼み台

故郷に咲きこぼるるか振れ花

雨蛙鳴いて眠れぬ夜半かな

青果店巡り青梅運びけり

梔子の花の香に居る二人かな

四五人のクレール齧る片かげり

夕涼の書店手に取る奇巖城

耳澄ますラジオドラマや夕端居

綾乃

薔より紅色見せる庭の薔薇

老鶯の声に惹かるる森の道

やや曇る空に匂うて栗の花

訪ねたる家の四葩の白きかな

氣が付けば酢漿の花揺れてをり

川に出て一途に飛べる夏燕

夏の朝山の向うは雨となり

中腹に一軒の家山茂る

目白鳴く夕日の杜のそこここに

朝顔の小道に犬とすれ違ふ

白昼やじつとしてゐる黒き蠅

夕番のいくつかありて貸しボート

古团扇五右衛門風呂の傍らに

烏賊焼きに袖を汚せし夏祭

夕立やフエンスに並ぶビート板

夏山やスイッチバックも消えるとして

ここよりは下り道なり大夕焼

山ひとつ呑み込んでゐる大夕焼

炎登にテイクアウトの列長し

分水嶺越して味はふ夏料理

花菖蒲夫を誘うて歩きけり

仕事終へ紫陽花の咲く寺に行く

モネの庭青き睡蓮咲いてをり

繡線菊のかすかな風に揺れてをり

楊梅の大樹となりて里の家

雨上り庭にいつばい百合の咲く

庭仕事すれば聞こえて時鳥

溪谷の滝の音する道を行く

合歡の花あの山裾に咲く頃か

無花果を帰り来し子に出してやり

井藤希

栄吉

大畑恵

螢狩歩き慣れたる道の周

我たびも藻草に触れて川とんぼ

梅雨明けの床にとりどりヨガマット

真夏日の女性ばかりのカフェテラス

炎天の坂を下りて犀を見に

夕映の水に映りて令歎の花

蓍草子らの集ひて賑やかに

遠山に雲の出でけり草を刈る

山寺の礎を築めたる夏夕日

船上に仰ぐ弥山の白雨かな

暁子

芦田川越えて立ち寄る薔薇の街

吾子と行く鞆の昼餉は鯛そうめん

常夜燈照らす西日や鞆の浦

梅雨さなか訳もなく吹くハーモニカ

山裾に咲く竹煮草子に教へ

雨の音ときに激しき夏越の夜

凌霄花見たくて少し遠回り

白南風や姉妹集へる姉の忌に

子カマキリ木から我が手にぞろぞろと

バスを待つ我らを襲ふ白雨かな

すみれ

譲り合ひ渡る木の橋黄菅咲く

アンカーにバトンを渡し汗拭ふ

夏風邪の癒えて張りある母の声

樟越えて見失ひたる黒揚羽

一抱へほどの夏萩なびきをり

白南風や名も知らぬ実のあまた生り

大岩の形のままに蔦茂る

梔子の花の隣に腰下ろす

夕立の去つて母待つ一軒家

魚捌く手つき確かに朝涼し

知佳子

土手の路一抱へ採り夫帰る

三日ぶり母を訪ねる茄子の花

麦刈が昨日終はりし畑かな

隣の庭紫陽花ばかり咲いてをり

故郷より螢が出たと知らせあり

車止め螢の川を覗きけり

草の奥螢一匹見つけたり

宮の横百個以上の枇杷熟るる

牧牛の尻尾振るなり草いきれ

凌霄や久々に行く母の家

髪切つて鏡に映す緑雨かな

振花や音して見えぬへりコブター

ドクターへり屋上に着く夏の朝

夏至の雨何するとなく一日過ぐ

雨垂れやあぢさゐの色青が好き

泰山木咲く今日の花明日の花

走つては止まり蜥蜴の振り返る

初蟬の便りメールに届きけり

ナイターの帰途の半月仰ぎけり

惑星にそれぞれ軌道送り梅雨

フライパン浅蜷の聞く音のして

桐の花友の回復念じたる

縁側に野菜干したり梅雨晴間

窓窓に干し物並ぶ梅雨晴間

もどかしく会話す口に巴旦杏

黒鯛の飛び散る鱗掃きにけり

破れ堀くぐりて採す兜虫

胡麻はどの蟻蛸が数多すばしこし

新芽食む小さき蟻蛸を捕へたる

喧嘩して摺りつけをり山椒の実

ちどり

辻純江

雲雀

神鳴やビルの隙間を覗く人

神鳴やカバンを探る人もいて

バラソルの後ろ姿や高速船

サングラス階段の踊り場にたむろ

夏館山の日陰になりにつけり

太陽を浴びる毛虫の静かなる

同じ日に生まれて大小の毛虫

夏の夜悲鳴のホームラン静か

ガラガラの毛の生えている早桃かな

色違うパイナップルの山二つ

名の違ふ夏蝶三羽庭に来る

目で追ふもまた見失ふ夏の蝶

夏蝶の去りてひととき一人かな

部屋裏少女の背まで葵咲く

アンカーのバク転打つて夏の空

振花を五六本手に子の帰る

雷のつひに近づく真昼時

麦蟬の鳴いて夕日のどき沈む

暑がりど寒がりの居て扇風機

冷房車降り雑踏に紛れたる

バイエルの聞こゆる窓の四葩かな

日捲りも半ばとなりて額の花

五月雨に裾を濡らして朝参り

シヤガールの青のやうなり五月晴

指笛に犬駆け寄りて五月晴

蚊遣火を提げて出でたる雨後の庭

風炉煮前湯の沸く音に正座して

湯上りの喉につると心太

白シャツを叩いて干しぬ日曜日

水撒や遠く聞こゆるジェット音

ふじ女

松田裕子

村上理江

祖父の墓訪うて戻りぬえこの花
通学に触つて通る山^や桜桃

朝涼の園児の声の大きいなる

湾頭に寄する赤潮港風

水すまし水面に映る雲よぎる

初蟬や何か良いことありさうな

先頭の山車は子供が曳いてをり

生家今も湧き水を引き瓜冷す

手術痕映す鏡の真つ裸

青山椒揺りをりニュース流れをり

森口良樹

雨の音強くしてをり髪洗ふ

夏椿道まで散つて角の家

夏シャツの子ら賑やかに通り過ぐ

水近く鹿の来てゐる大書かな

夏草に熊鈴鳴らし峠越す

麦こがし母の話を聞いてをり

娘から土産に貰ふアロハシャツ

蓮の景の上へ下へと夏の蝶

夏虫の祭支度に来てをりぬ

桑門わかこ

梅雨明けの畑に来てゐる鳥の子

螢袋しやがんで覗く姉いもと

河鹿鳴き棚田の上に祖母の家

見下ろせばドックの青き火土用あい

噴水のしづきにどとと雀来る

一人住む窓に今年も女郎蜘蛛

ここからは一人で帰る青田波

白シャツの胸の腋らみ名刺入れ

白湯を飲む朝の厨へ蟬時雨

山野ウタ

草の端に大き翅立て夏の蝶

遠雷や束の間見えし青き空

雷雨中テールランプの赤き列

雷去るや留守居の時の長きこと

パラソルの並ぶ川辺の喫茶店

立ち話友に日傘を差し掛けて

大原良子

梅干しの紫蘇を用意の親子かな

心太好める人の手土産に

白玉の団子供へし昔かな

風鈴を聞くたび思ふ亡き人を

片蔭を選んで歩く散歩道

凌霄花いつもの場所に見上げたる

紀英子

化粧水用のどくだみ庭覆ふ

ほうたるの団地の中を飛びにけり

病める友帽子をかぶり草を引く

風鈴の音聞きながら絵本読む

炎天下集金の人水求む

須美れい

包丁を持つ手の止まる雷走り

蚊遣香はさみ将棋の続きをり

いきなりに孫のキッスや蔦の香

裸子にかすかに残る蒙古斑

工事場に異国の人も日の盛

後線に高く連なり入道雲

公園の蟬しぐれ聞き一休み

夏空や古き生垣刈り込まれ

庭木から蟬一匹が鳴き始む

朝顔のはみ出すほどに咲いてをり

蓮池にひと息入るる朝散歩

噴水の向うに友を見つけたり

ザクザクとトマト刻んで朝餉かな

宿浴衣そぞろ歩きの同じ柄

藤椅子の父は新聞読んでをり

高梨英子

民

撫子

三井寺の鐘の聞こゆる夏木立

梅雨晴間水路の多き五個荘

昼寝覚軒打つ雨を聞いてをり

穴道湖の土用蛸を食べにけり

白桃を丸ごと食ぶるうれしさよ

やす保

夏休みラジオ体操響きをり

夏バテに注意と母の電話かな

二階まで朝顔の蔓伸びにけり

目覚むれば外はつくつく法師かな

河原静子

豆腐屋はこと決めての冷奴

首振りの角度一定扇風機

夕焼け背に歩幅合はせて散歩せり

松並木過ぎれば夜見世増えてくる

みこ子

窓越しに静かに聞こゆ梅雨の雨

昼さがり市方を囲む蟬しぐれ

蟬の殻並木に見つけ雨上り

金川昭子

風鈴の鳴る改札に降り立ちぬ

清張の紫煙の書斎梅雨深し

華やかな久女の筆や濃紫陽花

熊谷ゆり子

コンサート終りし空に梅雨の星

ひまはりや曾孫くらゐのピアノスト

海越えて故郷に着き青田風

高嶋絹代

読み終へて句集を閉づる夏至の雨

瀬戸内の海を染めたる夏夕日

風鈴や母の古下駄履いてみる

友岡崇山子

時計草ゆらりゆらりと影の揺れ

墓所へと吹き上げてゐる青田風

炎天の煙めいてゐる瀬戸の海

美耶

子燕の口を大きく開けてをり

桑の実に雀の口の紅きかな

上島康子

令和五年六月度作品集より

すみれ 私の選んだ十句

花の雨吉備の家々濡らしけり	佐保光俊
近道をせむと入りたる木下闇	村上正人
つばくらめいく度も橋を潜りけり	高尾ひとみ
庭に来て夕暮れ色の揚羽蝶	あざみ
青空に一匹の蜂止まる如	亜矢
早々に雨戸を閉めし梅雨の雷	栄吉
首夏の池一日かぎりの花咲いて	暁子
蛇苺大樹の向うまで覆ひ	知佳子
とうかささん家族で通り賑はひて	雲雀
さくらんぼ銜へたままにクイズ解く	高梨英子

ちどり 私の選んだ十句

夕焼の鬼ノ城へ向き帰りけり	佐保光俊
掬ひ来し金魚出窓に飼うてをり	あざみ
チューリップ片側傾ぐ文机	亜矢
川音の絶ゆることなき新樹かな	井藤希
父の日や父を見上げし頃もあり	栄吉
夏萩や明かりの点る母の家	知佳子
子かまきり枝に重なりぶらさがり	松田裕子
浴衣着の深き肩上げ姉妹	高梨英子
満月が水面に映り余り苗	山野ウタ
山裾に大きく揺れて今年竹	大原良子